

〈史料紹介〉

前川五郎左衛門家文書 京都御用米会所貸付会所記録

渡邊 忠司

はじめに

ここに紹介する史料は、佛敎大学図書館所蔵前川五郎左衛門家文書（以下前川家文書）の御用米代銀貸付会所に関する諸記録四点である。近世京都二條城の蔵米は御用米会所において、京都・大坂・大津の米屋から入札を募り、定期的に売り払われていた。御用米会所は寛文八年（一六六八）以降京都町奉行が管轄する、二條城蔵詰米（城詰米、備蓄米）の入れ替えに伴う市中払い米を管理する部署であったが、享保二十年（一七三五）以後京都の米屋（米商人）に管理が委託され、附属する貸付方も米屋の管理に変更された^{（1）}。

「御用米貸付会所」は蔵米払米である二條御蔵囲米代金銀を原資として、大名はじめ町方・村方等に貸し付けられていた。記録は文政十年（一八三九）に貸付会所の業務を請け負った前川五郎左衛門こと恵比須屋莊兵衛が所持していた。この前川家文書は多くの京都御用米会所の運営に関わる記録を含む文書群である。さきに本誌第十

二号(二〇一六年三月)で紹介した御用米会所の『由緒并仕来り書』解題で述べたように、恵比須屋は初代の荘兵衛が延享三年(一七四六)以降に金貸業を商いの基盤としたことに始まる。五代目荘兵衛の代文政十年に米会所貸付方の運営に関わり、さらに御用米会所の運営にも関与することで特権的な営業権益を得てさらに蓄財し、京都糸割符仲間にまで加わる京都商人となった。⁽²⁾

荘兵衛は文政十二年以降、貸付会所(貸付方)を「一ト手」に取り仕切るようになり、それを契機に、天保二年(一八三二)には恵比須屋荘兵衛から前川に替え、御用米会所貸付方前川五郎左衛門と名乗るようになった。御用米会所および貸付方の記録は、文政十二年以後の貸付方取締となって以後に奉行宛に差し出した由緒書の作成に関わる部分が大半である。

前稿でも触れたように、今回の貸付方の記録は「由緒并仕来り書」と合わせて、研究がほとんどない京都米会所に関する貴重な記録である。また前川家文書は恵比須屋荘兵衛の営業と京都市中の金融業の研究にとって貴重な資料群でもある。⁽³⁾

一 御用米会所貸付会所について

畿内・西国の徳川將軍直轄領の年貢米・銀(銀納分と運上銀など)は、大坂御蔵(大坂城内と難波蔵)・二條御蔵(および大津蔵)、江戸浅草御蔵に納入されていた。五畿内・近江・丹波・播磨は大坂・二條へ、近江は大津御蔵へ納められ、納入高は正徳から享保初年にかけて総高一〇万石に上っていた。⁽⁴⁾ いずれも大坂・京都町奉行の与力・同心ら諸役人の給米と、軍事的な意味合いの城詰米(備蓄米)として保管する蔵である。その稼働は大坂御蔵

が元和五年(一六一九)以降、大津御蔵が慶長五年(一六〇〇)以降、二條御蔵が伏見城の廃城に伴う二條城への軍事的・政治的機能の移管による寛永二年(一六二五)以降である。

これらの城詰米はその目的と性格から毎年の入れ替えを必要とした。二條城御蔵の場合は寛文八年(一六六八)以後は京都町奉行の管理下にあり、京都蔵奉行が実務を担当する形式で実施され、記録が確認される元禄五年(一六九二)以降は、諸役人給与等への支給残米が毎年京都・大坂・大津の米屋を対象にした入札による払い下げ(払米)方式で京都市中ほかに環流した。

払米の石高と入札期日は、毎年京都町奉行の触書で京都・大坂および大津市中に告知された。払い下げの最初の記録は、元禄五年六月十八日・七月十七日の触による大坂御蔵の大豆と米の「現銀売払入札」であった。このとき大豆三七〇〇石余と米二六〇〇石余の入札期日が提示されている。⁽⁵⁾

この蔵詰米の払米管理役所が御用米会所であり、享保二十年(一七三五)十二月に京都・大津の米屋に出された「口触」によって、民間委託ともいふべき京都・大津の米屋(米商人)による運営管理となった。口触によると、京都町奉行の下で、頭取と組頭が売買と諸事伺い、奉行の下知のもと差し図を受けて京都・大津市中の米屋らを取り仕切ることとなっている。京都米屋からは頭取役・組頭役それぞれ三名、大津米屋からは頭取役・組頭役それぞれ一名が指名され、「京都惣米屋共」(また大津米屋共)を統轄する機構であった。⁽⁶⁾

その米屋をみると、京都の頭取役は坂本屋善兵衛・伏見屋嘉兵衛・奈良屋市兵衛、組頭役は多田屋善兵衛・長浜屋嘉兵衛・三文字屋市兵衛、大津の頭取役は木屋久兵衛、組頭役は銭屋九兵衛であった。この運営機構は、すでに同年十月に京都東・西御奉行立会の上、京都・大津の「米筋御用」として頭取四人・組頭四人八名が京都・大津の区別なく頭取役と組頭役に任命されている。⁽⁷⁾

御用米会所のもう一つの機能が売払代金・銀の諸役人・市中・在方への貸付である。その管理運営の担当が御用米代銀貸付会所であった。二條城詰米は軍事的役割が薄れ不用になるにつれ、二條御囲米と称されるようになっていた。記録には「御役所御用金并御囲米代金銀貸付方」とあり、享保二十年の御用米会所の米屋委託とともに貸付方も同じ方式で開始された。元文二年(一七三七)には、返済滞納に対処するための「貸付証文案分」が京都町奉行から下されている⁽⁸⁾。

当然のことながら、御用米会所の米屋委託時には恵比須屋莊兵衛は存在しない。莊兵衛の登場は延享以後のこととて、米屋ではなく金貸業で蓄財した後に金融業に進出し、その経緯を前提に文政十二年(一八二九)三月の御用米会所貸付方の請負に繋がる。文政十二年の貸付会所由緒書によると、請負は寛政八年(一七九六)六月以後に生じた御用米会所の「区々」な取扱と「混雑」の原因が多人数によるためと断定して、恵比須屋が京都町奉行に対して多人数ではなく「貸付方私一ト手ニ引請」ることが混乱の解決に最善と願い出た結果としている⁽⁹⁾。

二 掲載史料の概要

「史料一 貸付会所由緒書」

原題は「文政十二丑年八月改 由緒書之扣 但貸附会所之方計也 六角御用米会所」である。記録は京都町奉行宛に御用米会所貸附方恵比須屋莊兵衛が差し出した貸付会所の由緒書で、文政十二年(一八二九)八月と天保二年(一八三一)十一月に両奉行所勘定方に二冊宛差し出した由緒書の「扣」三冊から成っている。

記録には「壹番」「貳番」「三番」の朱書された番号が付けられ、いずれも差し出した経緯と認め方が記されて

いる。東勘定方四方田重丞・土屋丈右衛門宛に差し出された文政十二年八月「老番」の表紙には、御用米会所の由緒書の跡に貸付方会所の由緒書が綴じられることと、貸付方の由緒書を差し出した訳書も記されている。

それによると、由緒書の作成・提出の理由は文政十二年に御用米会所貸付方を恵比須屋莊兵衛がに引き受けたことによる。莊兵衛はこの経緯を「貸附方訳書」として記している⁽¹⁰⁾。

文政十二年三月以来貸付方引別自宅^江引取候二付、以来^者米方会所由緒書之跡^江不致閉込二別帳^ニ而差上申上度段奉願度事、

貸付方引請の莊兵衛は五代目である。ここには恵比須屋が文政十二年三月から会所を「自宅」へ引き取ったことと、貸付会所由緒書の差し出し方の変更を願っている。表紙には、これまで米会所由緒書の跡に貸付方の由緒書を綴じていたが、以後は別帳で差し出したい旨を求めている。この願意は、貸付会所を自宅引取と「一ト手」引受に至る経緯との関連で本文に記されている。

恵比須屋「一ト手」引受の事情は貸付方運営の混乱にあった。貸付方は「両御役所御用金銀并御囲米代金銀貸付方」と称され、米会所が管理していた。由緒書によると、貸付方の運営は寛政八年(一七九六)六月には「貸付方惣代者共」が取り扱っていたが、その後に米会所頭取・組頭・米方惣代と貸付方惣代が一緒に運営に荷担したために、取扱方が区々になり、調え方も混雑し不行届の状態が出てきたので、恵比須屋莊兵衛が「一ト手」に引き受けてきた、これを承けて文政十年十一月十八日に米会所一統から恵比須屋莊兵衛一人へ運営を全面的に任せる旨の願書を差し出し、同年十二月三日に「願之通」に認められと記している。これに対する莊兵衛の「御請書」が付けられて、記録が作成されている。

由緒書には、享保二十年(一七三五)に米会所の管理・運営の米屋への委託、同時に御役所御用金と囲米払米代

金銀の貸付方の運営引請、請負に関わる冥加金の内訳、御米代銀納入の期限と滞納の際の利足、文政十二年の貸付方の米会所からの引き分け、同時に恵比須屋莊兵衛の貸付会所一手請負、などが「壺番」から天保二年の「三番」までの変化が書き留められている。貸付方の運営機構やその変化、恵比須屋莊兵衛が貸付会所の独占的な差配に至る経緯を確かめられる記録である。

〔史料二 對馬(宗氏)屋敷滞納御用達金取立願一件留〕

原題は袋表に「天保六乙未年六月朔日對馬屋敷御用達金相滞御取立奉願候一件留并上訴訟之儀奉願候口上書」とある。袋には「五番」と朱書された天保九年六月十三日に東町奉行所勘定方に差し出された御用米会所由緒書が納められているが、さきの「史料一」に続く記録とみてよい。

宗氏京都屋敷の貸付金取立願は東御奉行深谷遠江守の掛関根中五郎・森孫六宛に差し出された。宗氏屋敷への貸付金返済が滞納されていたために取立を願った記録である。宗氏に限らず、諸大名は近世初期から財政難に喘いでいた。寛永年間から残る大名貸の記録はその事実を裏付けている。⁽¹¹⁾

宗氏屋敷滞納銀取立願は寛政十二年二月から七月二十五日を返済期限とした百両の借用に始まる。宗氏は御用達春日龜弥太郎ら七名を借主として百両を恵比須屋莊兵衛から借用した。⁽¹²⁾

一札

一金百両也

右者二本木御殿引揚入料ニ当時致御用之處実正也、返金之儀_者来七月廿五日限元利無相違返并可致候、為後日仍而如件、

寛政十二己丑年二月

春日 龜弥太郎印

別 所 正 七印

別 所 官 次印

田 井 渕 右衛門印

小 田 與 七印

信 田 忠 兵衛印

阿 比 留 喜 左衛門印

恵比須屋

莊兵衛殿

借銀返済は期日通りにはできなかつたようで、二月から七月の期限で天保六年にいたるまで毎年更新されたようである。莊兵衛こと前川五郎左衛門は京都町奉行に借用金返済を願ひ出ている。借金の取立と返済要求は毎年期限ごとに繰り返されたようである。それに対して春日龜弥太郎らからは何の返事も、また言い訳もなかつたために、訴訟による返済裁許を求めた。訴願が天保六年六月にあり、その対象は文政十二年二月から七月までの元金と利足金の滞納であつた。借金高は元金と利足を加えて百七拾八両で、七八両は滞納利足分であつた。

前川五郎左衛門は米会所役人の越前屋重兵衛を付添人にして奉行宛に口上書を差し出している。訴願が成功したかどうかは不明であるが、記録は御用米会所貸付方が大名にも払米代金銀を貸し付けていた事例である。詳細は本文史料を参照されたい。⁽¹³⁾

本史料には、この他さきに触れたように「五番」と肩書された天保九年作成の由緒書が袋に入れられている。

これには御用米会所と御囲米代銀貸付方の由緒書が書き上げられており、東御勘定方に差し出されている。さきの「壺番」から「三番」のあと天保九年までの経過が書き足された由緒書となっている。

この由緒書で重要な事柄は天保三年七月に貸付方取締「定」が規定されている事実である。「定」は一二ヶ条あり、貸付方の正路な取り計らい方を眼目としている。詳細は本文史料を参照されたいが、これらを通覧・検証すれば、貸付方会所を恵比須屋莊兵衛が「一ト手」に取り仕切るようになった背景・要因を明らかにすることができる。⁽¹⁴⁾

〔史料三 文政十三年(一八三〇)東西御役所拝借金銀元高諸願留〕

原題は「文政十三^{庚寅}年三月調 文政十三^{庚寅}年正月改 東西御役所拝借金銀残元高天明八申年四月以来諸願留書留」で、六角の御用米会所の作成となっている。内容は、一つが東西町奉行所の拝借金銀高の内訳の書き上げ、二つには天明八年(一七八八)以後の「諸願留書留」が寛政元年から嘉永二年までの凡例である。

東町御役所の拝借銀の内訳を上げておく。⁽¹⁵⁾

東 御役所拝借金銀高

寛政八辰年六月

金八百八拾両三分式朱永五拾五文七分六厘四毛

銀千四百九拾七貫八百拾三匁六分五厘

右之内

金百六拾両 寛政八辰年十二月^乙 上納
銀貳百六拾貫目 文政十二丑年十二月^迄

引残

金七百貳拾兩三分貳朱永五拾五文七分七厘四毛
銀千貳百三拾七貫八百拾三匁六分五厘

右者 文政十三寅年正月改御金銀高

東公吏方拝借

寛政六寅年閏十一月

元銀七貫五百六拾五匁八厘但利足月六朱定

右者 毎年六月十二月毎ニ利足計上納

東勘定方拝借

元銀拾貫目

但利足月六朱定

右者 毎年六月十二月毎ニ利足計上納

東御藪方拝借

元銀拾五貫目

但利足月四朱定

右者 毎年六月十二月毎ニ利足計上納

東町の役所全体の拝借銀、公事方・勘定方・藪方それぞれの拝借銀が書き上げられ、西町の分も同様に「西御役所拝借金銀高」として書き上げられている。これによると、役所の拝借銀は寛政六年また八年に始まり、文政十三年までの返済分と残高が利足とその分の上納とともに記される。役所が米会所貸付方から借金するという事態・状況があったことを示す事例である。⁽¹⁶⁾

天明八年以後の「諸願例書留」は奉行所からの貸付証文の内容・真偽に対する問い合わせに答える形で示され

ている。天明八年四月の口上書は、奉行から御用米会所の頭取・組頭に貸付銀と貸付証文に関する「御尋」つまり問い合わせに対する返答書である。⁽¹⁷⁾

就御尋口上書

一近江屋忠藏^江銀子貳貫目借請罷有候哉之儀御尋御座候、此儀忠藏口入を以銀貳貫目高瀬川筋正面廻ル町総屋万兵衛^江貸付証文の切り替えがあつたが、それを忠藏に預け置く状況になっていた。いわゆる又貸し、振替銀の貸付証文が再度忠藏へ移動していたが、問い合わせに対し忠藏を吟味して二貫目の返済を行わせるには会所からの貸付証文を下げ渡してほしい旨を申し上げている。

仕候得共、右会所^江預候貸付証文御下ヶ被成下候様御断奉申上候、右之通御聞済被成下候ハ、難有可奉存候、御尋ニ付此段奉申上候、以上、

天明八申年四月

亀屋茂 七印

亀屋六右衛門印

御奉行様

ここには最初の借請人近江屋忠藏の銀二貫目が総屋万兵衛へ又貸しされ、その後に米会所入用のため忠藏方から万兵衛へ貸付証文の切り替えがあつたが、それを忠藏に預け置く状況になっていた。いわゆる又貸し、振替銀の貸付証文が再度忠藏へ移動していたが、問い合わせに対し忠藏を吟味して二貫目の返済を行わせるには会所からの貸付証文を下げ渡してほしい旨を申し上げている。

この口上書は米会所貸付方による貸付銀・貸付証文の取扱が混乱していたこと、米会所とそれに附属する貸付方との連絡が不十分であったことなどを窺わせる。この点は貸付方の由緒書に記す文政十二年の前川五郎左衛門「一ト手」取扱への変更、それに繋がる頭取・組頭・米方惣代・貸付方区々の「調方」、それによる「混雑」の

一端といえよう。これに加え、記録は天明四年の京都大火による御用米会所の取計方職務と囲米払いの断絶があり、払米が寛政元年に至るまで行われなかったことと、大火に対応して新規に米商いを始めようとする者が増加した⁽¹⁸⁾ことにもあることを指摘している。

これらの口上書類は、貸付方の貸付金銀返済滞納の凡例的な事例としてあげられている。滞納して、貸付引当の家屋敷が闕所になった場合の取扱方、その家屋敷払い分の代銀は会所へ下されること、貸付金引当の沽券状を紛失した場合の新沽券状割印の願い方、御用銀を貸し付けた者が死去した場合の対処の仕方、米会所への質流れ出入の訴訟の取り上げ方、在方への御用銀貸付が村方庄屋・年寄ら「役前之者不残死失」した場合の取り扱い方、囲米払米買い入れ商人が代銀を滞納・家出した場合の対処、などが実際の、具体的な事例を取り上げて「書例」としている。⁽¹⁹⁾

いずれも御用米会所貸付方の運営実態を明らかにする記録となる。

「史料四 天保三年二條御藏御囲米代金銀貸付証文案」

原題は「天保壬辰年閏十一月三日奉伺御聞済之上相改 二條御藏御囲米代金銀貸附証文案」である。町方・村方などへの貸付と貸付証文の書き方つまり案紙がまとめられている。その表題をみると、払米代金銀の運用と貸付先の多様さが示されている。史料に収録されている一三点の証文案を示すと、

「家屋敷沽券状書入連印貸」「家屋敷沽券状町中引請貸」「無引当町中引請貸」「家屋敷書入連印貸」

「沽券状町中要用貸」「無引当町中要用貸」

「田地山林作徳米書入連印貸」「田地山林作徳米書入村中引請貸」

「郷方無引当連印貸」「無引当村中引請貸」

「郷方書入連印貸」

「田地山林作徳米書入村々村中要用貸」

「無引当村々村中要用貸」

などがあり、「引当」(担保)を伴う貸付証文、担保なしの貸付証文、町中・村中宛の貸付証文などの書式が上げられている。書式の一例をあげよう。⁽²⁰⁾

^(朱書)

「家屋敷沽券状入連印貸」

預申御米代^{銀金}之事

二條御蔵御囲米代^{銀金}之内

一^{銀金}何程但利足月何程定

右者御米代^{銀金}連印を以慥預申処実正也、

来何月廿五日限無相違御上納可仕候、則為引当

何町通何町側

一家屋敷壺ヶ所<sup>表口何間
裏行何間</sup>何屋誰所持

^(朱書)

「此間三四寸計明ヶ置可申、沽券状見改
之上名前違等有之候ハ、此処^{江品書可}
致事余々之順也」

右沽券状壺通相渡置申候、

右之通差出置候、万一及遅滞候ハ、右家

屋敷早速売払代^{銀金}を以御上納可仕候、其上

不足仕候ハ、相残印形之者引請、元利都

合無難渋急度御上納相立可申候、依而如件、

所書

年号支何月

何屋 誰

妻 誰

所書

何屋 誰

御用米会所

これは町方個人への貸付証文の書式である。貸付金額と利足の明示、借用本人と請人の署名連印、毎月二十五日の「上納」(返済)日限の確認、その「引当」(担保)物件である屋敷地・所持者の明記、その証拠の沽券状差し出しが書き上げられ、返済遅滞の際は家屋敷の売却による借用金銀の補填を求められ、返済額の不足は連印者による元利共の「上納」も義務づけられている。

これは書式からみるかぎり当時の一般的な借用証文である。一般的な借用証文との相違を敢えていえば、必ず「引当」物件が明示されていることであろう。その貸付先からみると、「引当」のない町中・村中引請貸もあるが、町中・村中要用貸、郷中引請貸・郷中要用貸など町・村・郷の地域共有の運営経費や不足部分の補填を目的とするような貸付もある。また田地・山林・作徳米など、明らかに村・郷の耕作および生活環境を担保とした借付もあった。これらは御用米会所の払い米代金銀貸付先が多様であったことを示しているが、この点は貸付方を「一ト手」に取り扱う恵比須屋莊兵衛の金貸業の経験から来る部分が大きいのであろう。

おわりに

今回の史料紹介も前稿「由緒并仕来り書」に引き続き二條城御蔵の払米に関する記録である。二條城御蔵の城詰米は、京都町奉行所の管轄下の御用米会所によって毎年市中米屋に払い下げられ、その払米代金銀は御用米会所貸付方から大名をはじめ町方・在方まで広く貸し付けられていた。享保二十年には、この役所が京都・大津の米屋から頭取・組頭を指名して運営されるように改変された。

記録は四点であるが、貸付方の由緒書を中心に、貸付先の実態、滞納への対処、遅滞分の取立などのほか貸付証文の書式(雛形)に関する記録を掲載した。二條城御蔵に限らず大坂の御蔵の払い米の実態は不明な部分が多い。史料の不足にあることは間違いないが、前稿でも触れたように、京都・大津の米流通や金融に関心が向けられていないこともその一因であろう。

史料では、米会所および貸付方の由緒と機構、業務内容の実態を明らかにする基礎となろう。詳細は史料本文を参照されたい

キーワード：御用米会所貸付方、二條御蔵払米、貸付方取締

〈注〉

(1) 『京都町触集成』第一卷。

(2) 拙稿「近世二條蔵詰米と京都商人」(『佛敎大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第十号、平成二十六年三月)参照。

(3) 『京都の歴史』第五卷・六卷は近世編であるが、京都米会所に触れるところは多くない。最近米会所の概要について若干の研究が出されている。前川五郎左右衛門家文書第四卷、解説(尾脇秀和氏執筆)および稲吉昭彦「近世後期京都における御用米会所貸付方の独立と恵比須屋莊兵衛」(『佛敎大学総合研究所紀要』別冊2、二〇一三)。

(4) 『京都御役所向大概覚書』上卷、八九六頁、清文堂出版、一九七三。

(5) 『京都町触集成』第一卷(以下『集成』)は元禄五年(一六九二)以後の払米の記事を載せるが、その最初の記録は大坂御蔵の大豆と米の「現銀売払入札」の元禄五年六月十八日・七月十七日の触である。

「六月十八日触」を掲げておく。

覚

一大豆千九拾四石五斗余

内三拾三石四斗余豊前今井九右衛門納

一大豆貳千六百七拾八石余三田次郎右衛門納

右者於大坂御蔵現銀御売払入札有之間、明十九日方来ル廿五日迄之内、淡路屋敷へ家持請人召連参、根帳二付、大豆見届、同廿六日之朝五つ時分札披候様ニ、売人共へ可申触事、

六月十八日

(6) 『京都町触集成』第一卷。

(7) 「由緒并仕来り書」(『佛敎大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第十二号、二〇一五)。

(8) 前川五郎左衛門家文書天保三年「二條御蔵御囲米代金銀貸附証文案」(本文「史料四」参照)。

(9) 前川五郎左衛門家文書「文政十二年由緒書扣」(本文「史料二」参照)。この記録には米会所と貸付方の機構が記されるが、ここでは触れない。

- (10) 前掲「文政十二年由緒書扣」(本文「史料二」参照)、本文九四頁。
- (11) とりあえず京都証人の大名貸については『京都の歴史』第五巻参照。京都商人那波屋が最初に始めたとされている。
- (12) 前川五郎左衛門家文書天保六年六月「對弐屋敷用達金相滞御取立奉願候一件留」(本文「史料二」参照)。
- (13) 前掲前川家文書「對弐屋敷用達金相滞御取立奉願候一件留」(本文「史料二」参照)、九九頁。
- (14) 前掲前川家文書「文政十二年由緒書扣」(本文「史料二」参照)、本文九四頁以下。
- (15) 前川家文書「文政十三庚寅年正月改東西御役所拝借金銀残元高」(本文「史料三」参照)、一〇七頁。
- (16) 役所が貸付を行う理由は運営経費の不足とその補填のためである。大坂町奉行所も闕所による没収金銀や屋敷地の売却などの金銀を原資として与力・同心、町方に利貸して奉行所経費の補填に用いていた。拙稿「大坂町奉行所の財政基盤と構成」(大阪市史編纂所『大阪の歴史』第四十四号、一九九三)。
- (17) 前川家文書「文政十三庚寅年正月改東西御役所拝借金銀残元高」(本文「史料三」参照)、一〇八頁
- (18) 本文「史料三」、一〇八～九頁参照。
- (19) 本文「史料三」、一一〇頁、「口上覚」以下参照。
- (20) 本文「史料四」、一一九頁「二條御蔵御囲米代金銀貸附証文案」参照。

凡例

一 本史料は佛教大学附属図書館所蔵の「前川五郎左衛門家文書」の京都御用米会所貸付方に関する史料の翻刻である。

一 翻刻史料の表題は基本的に原文に従ったが、史料の内容に応じて変更した場合もある。その場合は「」を

用いて示した。

一 本文翻刻にあたっては、表記は原則として常用漢字を用いた。但し、変体仮名は現行の字体に改めたが、助詞として用いられる「江(え)、者(は)、而(て)、茂(も)、与(と)」についてはそのまま用い、小さく表記した。また異体字(躰・𠬪)・合字(𠬪)などもそのまま用いている。

一 そのほか翻刻の際、翻刻校訂者による注記を掲げておく。

貼紙・付紙・付箋などは「」で示し、右肩に(貼紙)(付紙)(付箋)などと付した。

印判は(印)、花押は(花押)等で示した。

虫損・破損および判読不能部分については、字数の確認できる部分は□の数で示し、確定できない場合は「ムシ」で表示した。

原本の抹消・改変の部分については、判読できる場合は左側にクククを付して表記した。

誤字・脱字については、誤り・脱字が明らかである場合は傍注()で表示した。

一 固有名詞や地名・人名は原則として原文表記に従った。

一 史料の翻刻にあたり、記事中の読点を新たに付け、翻刻校訂者が行った変更部分は()または「」を付けて表示し、注記を付した。

〔付記〕 本稿で用いた史料は佛教大学図書館所蔵の前川五郎左衛門家文書である。翻刻にあたっては佛教大学図書館の御高配を得た。記して感謝を申し上げる。

史料一 文政十一年貸付会所由緒書

(袋入)
一 文政十二年八月改

由緒書之扣

貸附会所之方計也

六角
御用米会所

(表紙)
「朱書」
「巻番」

文政十二年正月神尾備中守様御参府二付、岩国半紙目打二相認致袋閉、米方会所由緒書之跡江閉込、東御勘定方江式冊差上候事、

御掛四方田重丞様 土屋丈右衛門様

貸附方訳書

文政十二年三月以来貸付方会所引別自宅江引取候二付、以来者米方会所由緒書之跡江不致閉込二別帳ニ而差上申上度段奉願度事、

御用米会所
貸附方

「恵比須屋莊兵衛」

一米会所江引請被為 仰付置候而

御役所御用金銀并御囲米代金銀貸付方之儀、去ル寛政八辰年六月被為 仰渡候砌者万端貸付方惣代之者共取扱仕候処、其後区二相成、頭取・組頭米方惣代・貸付方惣代一体ニ而取調仕候二付調方混雜仕不行届之儀出来仕候二付、以来貸付方之儀者私一ト手二引請相勤、貸付金銀滞候口々御定日御取立、其外都而貸付二相抱候儀者万端私方御願奉申上度段、米会所一流方文政十亥年十一月十八日奉願候処、同年十二月三日願之通被為 仰付難有仕合奉 存候、則左之通御請書奉差上候、

御請書

一米会所引請

御役所御用金銀并御囲米代金銀貸付取調之儀、是迄頭取・組頭米方惣代・貸付方惣代一体ニ而取扱来候処、多人數ニ而取調方区二相成混雜仕申合難行届、自然不束之儀出来仕候而者恐入心配仕候二付、此度一流相談之上貸付方之儀者以来私一ト手二取扱、貸付金銀滞口々御定日御取立、其外都而貸付二相抱候儀者万端私方御願奉申上度段一流方奉願候処、願之通被 仰付、貸付方等入念是迄仕来通籠略之儀無之様仕、右二付不正之取計仕間敷旨被 仰渡奉畏候、依之御請書奉差上候、以上、

米会所貸付方

文政十亥年十二月三日 惠比須屋莊兵衛

御奉行様

右御用米会所由緒并仕来之儀奉申上候様被為 仰付候二付、

則貸付方私江被為 仰付候訳書奉差上候、

御用米会所
貸附方

文政十二丑年正月 惠比須屋莊兵衛

(表紙)
〔朱書〕
〔式番〕

文政十二丑年八月 小田切土佐守様御上

京二付、岩国半紙目打二相認致袋閉、紙

袋二入レ東

御勘定方江式冊差上候事、

由緒書

御用米会所
貸附方

惠比須屋莊兵衛

一御用米会所之儀者享保式拾年卯十月被為 仰付候事、
但

文政十二丑年迨九拾五年二相成申候、

一御囲米壺万石御払之儀者何之頃被為 仰付候哉難相分候

得共、米会所頭取并組頭引請銀上納等之儀是迨之通可相勤

旨、享保廿卯年十二月被為 仰付候事、

一享保十九寅年八月新御囲米壺万石御払被為 仰付、御米代

銀百五十日限二御預ケ被為 成候間、直段出情仕、請負証

文奉差上候様西 御役所ニ而被為 仰渡、勿論定式御囲米

御払之障二相成不申様相考奉買請候様被為 仰渡候事、

一御囲米代銀貸付之儀御太切之御米代銀二候間、入念貸付可

申、若相滞候節者早速申上候様被為 仰渡、元文二巳年貸付

証文御案文被下置候事、

附

宝曆五亥年八月後者右貸付銀相滞候節者御取立之儀、

東 御役所江可奉願旨被為 仰渡候事、

一右新御囲米壺万石奉請負候儀、連年右之通仕来相勤申候処、

安永式巳年正月右奉請負候御冥加銀奉差上候様被為 仰渡、

依之御冥加銀出方情々相考、右百五十日延御利足并御米代

貸付相滞候向茂在之候ハ、御為替銀貸付同様御取立等奉

願、右壺万石二付式拾四貫三百目御冥加銀可奉差上旨御請

奉申上候、尤御米御払高増減二応壺石二付式匁四分三厘之

割合を以御冥加銀奉差上候積二御座候、右之通被為 仰付

候二付、定式御囲米壺万石并御遣方殘米・大豆等新御囲米

之取計二准御冥加銀奉差上御請負可奉申上候様被為 仰付、

是又御請負奉申上候事、

一新規御囲米定式御囲米御遣方殘米・御大豆共御払之儀、御

用米会所江不残被為 仰付二付、是迄御米代銀百五十日延奉_レ上納候処、猶又貳百十日御延被成下、都合三百六十日延二被為 仰付被下候ハ、御米并御大豆共御払之分壹石二付四匁四分三厘宛御冥加銀奉差上候趣奉伺候処、安永三年六月_ハ再応御糺之上、願之通三百六十日延上納仕候様翌未年三月朔日奉蒙 御下知、去年十月定式御囲米御払始_ハ右之通二取計可仕旨、安永四年三月十日猶又奉蒙 御下知、一ヶ年分御払高計立、貳万石二付御冥加銀八拾八貫六百目二相当申候事、

一御囲米代金銀会所_ハ貸付返済相滞候者ハ御取立奉願候節御為替金銀滞、並

御奉行様於 御前御日限被為 仰付被下置候事、
但

明和五子年十一月右貸付引当之家屋敷御欠所二相成候分者家代銀被下置候様奉願候処、而 御奉行所御評議之上、前々之通願之趣御聞済被成下、其後貸付引当御欠所二相成候分御払代銀米会所江被下置候事、

一米会所引請兩 御役所御用金銀相滞候者共も御奉行様於御前御日限被 仰付被下置候事、

一米会所引請被為 仰付置候兩 御役所御用金銀并御囲米代金銀貸付之儀者万端貸付方惣代之者共取調仕候処、近來者区二相成、頭取・組頭・米方惣代・貸付方惣代一体二而取

調仕候二付調方混雜仕、不束之儀出来仕候而者奉恐入候二付、会所役一同相談之上、以来貸付方之儀者私一卜手二引請相勤、貸付方金銀滞口々御定日御取立、其外都而貸付二相抱候儀者万端私_ハ御願奉申上度段、米会所一同_ハ文政十亥年十一月十八日奉願候処、同年十二月三日願之通被為仰付、貸付方等入念可申旨御請書被為 仰付、其後文政十二丑年三月十一日勝手二付、会所役之者相談之上貸付方会所引別レ之儀奉願候処、願之通被為 仰付、則六角通油小路東江入町江貸付方会所相立罷在候事、

右御用米会所由緒并仕来之儀奉申上候様被為 仰付候二付、貸付方会所私江被為仰付候由緒書奉差上候、以上、

文政十二丑年八月 御用米会所 貸付方 恵比須屋莊兵衛印

(表紙)
〔朱書〕
〔三番〕

天保二卯年十一月 深谷遠江守様
御上京二付、岩国目打半紙二相認致袋閉上袋二入、東御勘定方江式冊奉差上候事、

由緒書

御用米会所
前川莊兵衛

一御用米会所之儀者享保廿年卯十月被為 仰付候事、

^但天保二卯年迄九拾七年二相成申候、

一御囲米壹万石御払之儀者何之頃^レ被為 仰付候哉難相分候得共、米会所引請銀上納等之儀是迄之通可相勤旨、享保廿卯年十二月被為 仰付候事、

一享保十九寅年八月新御囲米壹万石御払被為 仰付、御米代銀百五十日限二御預^レ被為 成候間、直段出情仕請負証文奉差上候処、西 御役所二而被為

仰渡、勿論定式御囲米御払之障二相成不申様相考奉買請候様被為 仰渡候事、

一御囲米代銀貸付之儀御太切之御米代銀二候間、入念貸付可申、若相滯候節者早速申上候様被為 仰渡、元文二巳年貸付証文御案文被下置候事、

附

宝曆五年亥八月後者右貸付銀相滯候節者御取立之儀、

東 御役所江可相願旨被為 仰渡候事、

一右新御囲米壹万石奉請負候儀、連年右之通仕来相勤申候処、安永二巳年正月右奉請負候御冥加銀奉差上候様被為 仰渡、依之御冥加銀出方情々相考、右百五十日延御利足并御米代貸付ハ相滯候者も在之候ハ、御為替銀貸付同様御取立等奉願、右壹万石二付式拾四貫三百目御冥加銀可奉差上旨御請奉申上候、尤御米御払高増減二応壹石二付式匁四分三厘

之割合を以御冥加銀奉差上候積二御座候、右之通被為 仰付候二付、定式御囲米壹万石并御遣方殘米・大豆等新御囲米之取計二准御冥加銀奉差上、御請負可奉申上候様被為仰付、是又御請負奉申上候事、

一新規御囲米・定式御囲米御遣方殘米・御大豆共御払之儀、御用米会所江不殘被為仰付二付、是迄御米代銀百五十日延奉上納候処、猶又式百十日御延被成下、都合三百六拾日延二被為 仰付被下候ハ、御米并御大豆共御払之分壹石二付四匁四分三厘宛御冥加銀奉差上候趣奉伺候処、安永三年六月^レ再応御糺之上、願之通三百六十日延上納仕候様翌未年三月奉蒙 御下知、去年十月定式御囲米御払始^レ右之通二取計可仕旨、安永四未年三月十日猶又奉蒙 御下知、一ヶ年分御払高計立、式万石二付御冥加銀八拾八貫六百目二相当申候事、

一御囲米代金銀会所^レ貸付返済相滯候者共御取立奉願候節御為替金銀滯、並

御奉行様於 御前御日限被為 仰付被下置候事、

但

明和五年十一月右貸付之家屋敷御欠所二相成候分者

家代銀被下置候様奉願候処、両

御奉行所御評議之上前々之通願之通御聞届被成下、其後貸付引当御欠所二相成候分御払代銀米会所江被下置

候事、

一米会所引請両 御役所御用金銀貸付返済相滞候者共茂 御奉行様於 御前御日限被 仰付 被下置候事、

一米会所引請被為 仰付置候両 御役所御用金銀并御囲米代金銀貸付之儀者万端貸付方惣代之者共取調仕候処、近來者区二相成、頭取・組頭・米方惣代・貸付方惣代一体ニ而取調候二付調方混雜仕、不束之儀出来仕候而者奉恐入候二付、会所役一同相談之上、以来貸付方之儀者私一ト手ニ引請相勤、貸付方金銀滞口々御定日御取立、其外都而貸付二相抱候儀者万端私方御願奉申上度段、米会所一同方文政十亥年十一月十八日奉願候処、同年十二月三日願之通被為 仰付、貸付方等入念可申旨御請書被為 仰付、其後文政十二丑年三月十一日勝手二付、会所役之者相談之上貸付会所引別レ之儀奉願候処、願之通被為 仰付、則六角通油小路東江入町江貸付会所相立罷在候事、

一貸付会所引別右於会所貸付金銀取引等仕罷在候処、引別レ之儀不相弁者茂御座候二付、文政十二丑年十二月御触流之儀奉願候処、御聞届被成下、是迄金銀借請人共者勿論以来借請度もの共右会所江罷越 可致相对旨洛中洛外江不洩様御触流被成下候事、

一恵比須屋与申家号ニ而会所相勤来候処、以来前川与苗字相乗、
(ママ、名乗カ)

御取立之節御上縁江 罷出相勤申度段、文政十一庚寅年六月朔日奉願上候処、御奉行様御通達之上同月七日願之通御赦免被成下候事、

右御用米会所由緒奉申上候様被為 仰付候二付、貸付方会所私江被為 仰付候由緒書奉差上候、以上、

天保二卯年十一月

御用米会所
前川莊兵衛

史料二 対馬(宗氏) 屋敷滞納用達金取立願

一件留

(袋表)
「天保六乙未年六月朔日

對刃屋敷用達金相滞御取立奉願候一件留
并上訴訟之儀奉願候口上書
東御奉行
深谷遠江守様御時代

御懸 関根中五郎様
森 孫六様

(袋裏)
「前川」

(表紙)
「天保六乙未年六月朔日

對刃屋敷用達金相滞御取立奉願候一件留
并上訴訟之儀奉願候口上書留
東御奉行
深谷遠江守様御時代
御懸 関根中五郎様
森 孫六様

一札

一金百両也

右者三本木御殿引揚入料二当時致御用候処実正也、返金之儀
者来七月廿五日限元利無相違返并可致候、為後日仍而如件、
寛政十二己丑年二月 春日 龜弥太郎印

惠比須屋
莊兵衛殿

別所正七印
別所官次印
田井測右衛門印
小田與七印
信田忠兵衛印
阿比留喜左衛門印

乍恐奉願口上書

文政十二丑年二月乙未同七月限 四糸河原町東入町南側
一元金百両
此滞利足金七拾八両
合百七拾八両

春日 龜弥太郎
京住
別所正七
別所官次

田井測右衛門
小田與七
信田忠兵衛
阿比留喜左衛門

(付箋) 「用達候節者京住二御座候処
當時国方住居之由」

(付) 「右同断」

(付) 「右同断」

(付) 「大坂住居」

先達而私江御貸下ケ御座候

禁裏様ニ御下ケ金之内振替別紙証文之通對刃様御用達春日龜
弥太郎其外連印を以金百兩用達置候処、元金者勿論錢目之利
足之儀差越不申、一応之断茂無御座、甚不実千万奉存、催促
茂仕候得共不法之断而已申聞、一向二赦不申、右御下ケ金之
儀ハ無抛私ケ取替上納仕候得共、今以返金之談茂無御座難儀
迷惑仕候、依之恐多御願ニ者御座候得共、格別之御憐愍を以
右之もの共被 召出、始末御糺之上何卒早々元利返済仕候様
御利解被成下候様奉願上候、右願之趣御聞済被成下候ハ、
如何計り難有仕合可奉存候、以上、

天保六未年六月

前川五郎左衛門印
付添
米会所役人
越前 屋重兵衛印

御奉行様

〔^{朱書}〕紙品継西之内にて右之通相認、未六月朔日五郎左衛門継上
下着用 東御公事方江差上候処、関根中五郎様・森孫六様
にて願書上置候様被 仰渡候、

但付添米会所役人越前屋重兵衛儀茂継上下着用之事、

同月五日此方不被召出、相手方之内春日龜弥太郎壱人被
召出、早々済方可仕旨被仰渡候由、同日夕方弥太郎申出相

頼候二者、大坂表江及掛合済方対談可仕候間、日数五日之
御猶予奉願呉候様相頼候二付、翌六日罷出、口上ニ而五日
之御猶予奉願候事、

同十二日追々及対談候得共少も引合落合兼候二付、尚又五
日之御猶予書付を以奉願候処、御聞済被成下、其後及引合
別紙済状留之通事済候二付、同月十七日済状奉差上候処、
即刻御公事方御部屋先ニおゐて御聞済ニ相成候事、」

乍恐済状

一春日龜弥太郎其外江貸付置候金子元利百七拾八兩相滞候付
御出訴奉申上候処、早速御召出被成下、御利解之上早々済
方可仕旨被 仰付難有仕合奉存候、依之早速対談罷越候得
共少々引合落合兼候付、日数五日之御猶予兩度ニ奉願、尚
又其後及引合右滞高之内江金五拾兩請取、八拾九兩右弥太
郎引請之証文差入、残金三拾九兩者用捨仕出入事済仕候二
付、乍恐済状奉差上候、何卒格別之御憐愍を以右之趣聞済
被成下候ハ、難有仕合可奉存候、以上、

天保六未年六月五日

前川五郎左衛門印
付添
米会所役人
越前 屋重兵衛印

御奉行様

春日龜弥太郎其外相手取貸付金滯出願ニ付 東御公事方江
差上候願書留

乍恐奉願口上書

一米会所役之者両

御役所様江罷出候節、改申者自分之儀にて茂上訴詔之儀先
達而御願申上御聞濟被成下難有奉存候、然処此度私貸附方
滯、出願之儀者全自分願之儀ニ御座候得共、前文奉申上候
通、自分之儀ニ而茂居町ニ不拘会所役人付添ニ而上訴詔之儀
者兼而蒙御免罷在候儀ニ付、先格之通会所役人付添上訴詔
ニ而罷出御願奉申上度貸附方会所私引請ニ相成候後、自分
願之儀者始而之儀ニ付、例書相添此談奉願上候、格別之御
憐愍を以右願之趣御聞濟被成下候ハ、難有仕合可奉存候、
以上、

天保六未年六月

前川五郎左衛門印

〔紙品継西之内ニ相認、例書并貸付金滯御取立願書取置候証

文又者一緒ニ未六月朔日已刻過五郎左衛門継上下着用 東
御公事方江差上候処、関根中五郎様・森孫六様にて願書上
置候様被 仰渡候事、

但付添米方会所米方惣代越前屋重兵衛儀茂継上下着用罷
出候事、

未六月三日被 召出、自分之儀にて茂会所役人付添ニ而上
訴詔之儀願之通御聞濟ニ相成候段御公事方御部屋ニおゐて
右御同人様にて被 仰渡候事〕

御奉行様

〔朱書
「差上候例書之留」

乍恐口上書

一米会所役之者共両

御役所様江罷出候節者役中者自分之儀ニ而茂上ハ訴詔之儀先
達而御願申上御聞濟被成下難有奉存候、然処、米会所役人
之内万寿寺烏丸西入町菱屋弥惣兵衛、□□室町坂本屋善兵
衛、大宮松原下ル町柏屋善七、右之者共儀米会所入用ニ付、
嶋本三郎九郎引請式朱判之内借請罷在候処、返済相滯、此
度御出訴申上、明十五日町役付添御召出ニ相成奉恐入候、
右之通自分儀ニ而茂上ハ訴詔蒙 御免、別而此度之儀者米会
所ニ相抱候儀ニ付、居町ニ不拘会所役人付添上ハ訴詔ニ而
罷出申度、乍恐此段御届奉申上候、御聞濟被成下候ハ、難
有可奉存候、以上、

天保二年卯八月十四日

御用米会所

前川莊兵衛印

頭取 柏屋善七印

同 坂本屋善兵衛印

御奉行様

右之趣西御勘定方江奉願候処、即刻

御聞置之趣深谷重次郎様被 仰渡候事、

(表紙)

(朱書)

「五番」

天保九戌年六月十三日東御奉行

本多筑前守様御上京ニ付先例之通相認

東御勘定方江二冊奉差上候事

但此扣之通松平兵庫頭様江書上候事

由 緒 書

御用米会所

前川五郎左衛門」

御用米会所之儀者享保二十年卯十月被為

仰付候事

但

天保九戌年迄百四年ニ相成申候

一 御囲米壹万石御払之儀者何之頃被為 仰付候哉難相分候
得共、米会所取引受銀上納等之儀是迄之通可相勤旨享保二
十年卯十二月被為 仰付候事、

一 享保十九年寅八月新御囲米壹万石御払披為 仰付、御米代
銀百五十日限ニ御預ケ被為 成候間、直段出情仕請負証文
奉差上候処、西 御役所ニ而被為 仰渡、勿論定式御囲米
御払之障ニ相成不申様相考奉買請候様被為 仰渡候事、

一 御囲米代銀貸付之儀御大切之御米代銀ニ候間、入念貸付可
申、若相滞候節者早速申上候様被為 仰渡、元文二巳年貸
付証文御案被下置候事

附

宝曆五年亥八月後者右貸付銀相滞候節ハ御取立之儀東
御役所江可相願旨被為 仰渡候事、

天保三壬辰年十一月貸付証文案伺之上相改候事、

一 右新御囲米壹万石奉請負候儀連年右之通仕来相勤申候処、
安永二巳年正月右奉請負候御冥加銀奉差上候様被為 仰渡、
依之御冥加銀出方情々相考、右百五十日延御利足并御米代
貸付相滞候ものも有之候ハ、御為替銀貸付同様御取立等
奉願、右壹万石ニ付式拾四貫三百目御冥加銀可奉差上旨御
請奉申上候、尤御米払高増減ニ応し壹石ニ付式拾四匁三厘
之割合を以御冥加銀奉差上候積ニ御座候、右之通被為 仰

付候二付、定式御囲米壹万石并御遣方残米・大豆等新御囲米之取計ニ准シ御冥加銀奉差上御請負可奉申上候様被為仰付、是又御請負奉申上候事、

一新規御囲米定式御囲米御遣方残米・御大豆共御払之儀御用米会所江不残被為 仰付候ニ付、是迄御米代銀百五十日延奉上納候処、猶又貳百十日御延被下、都合三百六十日延二被為 仰付被下候ハ、御米并御大豆共御払之分壹石ニ付四匁四分三厘宛御冥加奉差上候趣奉伺候処、安永三年六月〆再応御糺之上願之通三百六十日延上納仕候様翌末年三月奉蒙 御下知、去年十月定式御囲米御払始より右之通ニ取計可仕旨、安永末年三月十日猶又奉蒙 御下知候、一ヶ年分御払高計立式万石ニ付御冥加銀八拾八貫六百目ニ相当候事、

一御囲米代金銀会所より貸付返済相滞候者とも御取立奉願候節、御為替金銀滞並 御奉行様於 御前御日限被為 仰付被下置候事、

但 明和五年十一月右貸付引当之家屋敷御欠所ニ相成候分 者家代銀被下置候様奉願候処、両

御役所御評議之上前々之通願之趣御聞届被成下、其後貸付引当御欠所ニ相成候分御払代銀米会所方江被下置候事、一米会所引受両 御役所御用金銀貸付返済相滞候もの共茂

御奉行様於 御前御日限被為 仰付被下置候事、

一米会所引受被為 仰付置候両 御役所御用金銀并御囲米代金銀貸付之儀者万端貸付方惣代之もの共取調仕候処、近来者区々ニ相成、頭取・組頭・米方惣代・貸付方惣代一体ニ而取調仕候ニ付調方混雜仕、不束之儀出来仕候而者奉恐入候ニ付、会所役一同相談之上以来貸付方之儀ハ私一ト手ニ引受相勤貸付金銀滞候口々御定日御取立、其外都而貸付ニ相抱候儀者万端私〆御願奉申上度段、米会所一同〆文政十亥年十一月十八日奉願候処、同年十二月三日願之通被為仰付、貸付方等入念可申旨御請書被為 仰付、其後文政十二丑年三月十一日勝手ニ付会所役之者相談之上貸付会所引別れ之儀奉願候処、願之通被為 仰付、則六角通油小路東入町江貸付会所相立罷在候事、

一貸付会所引別れ右於会所貸付金銀取引等仕罷在候処、引別れ之儀不相弁者も御座候ニ付、文政十二丑年十二月御触流之儀奉願候処、御聞済被成下、是迄金銀借受人共著勿論借受度もの共右会所江罷越可致相对旨洛中洛外江不洩様御触流被成下候事、

一恵比須屋与申家号ニ而会所相勤来候処、以来前川与苗字相名乗御取立之節御上掾江 罷出相勤申度段文政十三庚寅年六月朔日奉願候処、両

御奉行様御通達之上、同月七日願之通御許容被成仕候事、
一天保三辰年七月貸付方為取締 御定札御下ケ之儀奉願候処、
御聞濟之上左之通御書下ケ頂戴仕候、

定

二條御藏御囲米代金銀并兩 御役所御用金銀貸付会所申付
候上者、諸事入念依怙最賈無之様正路二可取計候、聊二而茂
後聞致し方有之候ハ、急度可申付事、

一金銀貸付方之儀二付、借主或者口入之もの会所江申来候
ハ、得与相糺、判元見届候上貸可遣、尤証文差出候ハ、会
所之割印・奥印可致、勿論利足之儀者定之外高利取申間敷
候、且銀主有之分者定之通印料取之候儀者格別、其外掛り
物一切取申間鋪事、

一右貸付限月之儀者相対次第相極、返済限月利高証文江相認
置、利銀受取次第銀主江可相渡候、右割印・奥印有之証文
之分返済相滞銀主方会所江相届候ハ、会所方可訴出候借
受人共呼出急度取立可申付事、

一御囲米代金銀相滞候ハ、会所江呼寄可及相対、其上二茂不
埒二候ハ、借受人共呼出、為替金銀滞並嚴敷取立可申付置
候、

一両御役所御用金銀相滞候ハ、前同様取計、其上二茂不埒二
候ハ、可訴出候、定法之通急度取立可申付事、

一借主并証人之者死失致し候ハ、跡相続人、又ハ家出致し候
ハ、於会所得与及相対候上二も難相済候ハ、以訴詔相
殘連判之もの共江証文之通急度済方可申付事、

一町役并村役人共連判を以貸付置、右連判之内死失・家出者
勿論退役等致し候ハ、跡役之江証文之通急度済方可申付、
尤先約之者もの一同相通申間敷事、

一為引当取置候家屋敷持主出奔致し候ハ、可訴出候、家代銀
下ケ可遣事、

一借主并証人之者共死失候ハ、跡相続人出奔致し候ハ、銀
主共方早速会所江可相断、左候ハ、於会所二得与相対致し
候上二も難相済候ハ、可訴出、相殘連判之もの証文之通急
度済方可申付事、

一銀主并口入之者若拔貸不実之者有之候ハ、可訴出候、吟味
之上急度咎可申付候、勿論定候会所口入之外紛敷証文を以
貸付等致し候者有之候ハ、可訴出候、吟味之上急度咎可申
付事、

一借方之者共於会所法外之儀有之候ハ、早速可訴出候、吟
味之上急度咎可申付事、

一会所之もの常々權威ケ間敷儀少も致間敷、諸事相愼、貸付
方不正之儀無之様可致事、右之趣会所者勿論銀主口入之も
の共堅相守可申候、若相背候ハ、急度咎可申付もの也、

天保三壬辰年

七月

伊勢

遠江

天保六乙未年

九月

遠江

長門

天保八丁酉年

二月

長門

土佐

右之通御書繼被成下候事、

一同年同月両 御奉行様中 御勝手ニおゐて年頭・八朔・節句々々御暑寒御機嫌等奉伺度段奉願候処、御聞濟被成下、其後中 御勝手ニおゐて御糺奉申上候事、

一同五午年十月御囲米御名目を以拔貸又ハ品ニ似寄候紛敷貸付方致候もの有之候ニ付、右体之儀無之様御触流之儀奉願候処、御聞濟之上洛中洛外江左之通御触流被成下候、二條御藏御囲米代金銀之名目を以拔貸又ハ右ニ似寄候紛敷証文を以貸付不致し候もの追々増長致し、会所及衰微難儀之趣相聞候、右体拔貸者勿論右ニ似寄候紛敷証文を以貸付等致候儀者不埒之事ニ候条、早々右会所六角油小路東入町前川五郎左衛門方江及引合、口入印札を受不正之儀無之様貸付取組、証文ニ割印・奥印取之可申候、以後右体不埒之貸付

方致候もの於有之候者急度可申付候、右ニ付五郎左衛門儀弥以不正之取計無之様精々申渡置候、

右之趣洛中洛外江不洩様可申通事、

午十月廿六日

一同六未年三月私会所貸付方・口入之ものを為取締印札相渡申度段両 御役所江奉願候処、御聞濟之上口入之者江印札相渡候事、

一米会所役之者両 御役所江罷出候節、自分之儀ニ而茂居町ニ不拘会所役人付添ニ而上訴詔之儀先例ニ御座候処、貸付方会所私引受ニ相成候後始而自分願之儀御座候ニ付、天保六未年六月例書相添奉願候処、御聞濟之上先例之通居町ニ不拘会所役人付添ニ而上訴詔之儀御許容被成下候事、

一天保七申年二月朔日私為名代両 御役所江差出候手代共苗字為相乗申度段奉願候処、御聞濟被成下苗字相名乗候事、一同年九月六日、近頃米価高直ニ而市中末々之者致難渋候趣達 御聽候処、米屋共買入方行届兼候趣ニ付、為御救定式為登米有之先々之外新穀出来宜敷国々江罷越、米高凡式万俵程買入之儀私并嶋屋三郎九郎兩人江被 仰付、尤可成丈出情下直ニ買廻し着致候程宛手寄之場所見立出情致し、市中米渡世之もの江当可売渡旨、右為御手当兩人江銀百貫目宛壱ヶ年限無利足ニ而御貸下ヶ被成下、其余代銀不足之

分八年限ニ才覚仕、右為携候もの共不正之儀無之様可致旨被 仰渡候、且米買入先之儀西国筋江罷越候者先見合候越前・美濃・伊勢・伊賀路等取寄国々江重モニ罷越買入可仕様、且買入米出来候ハ、其度々石高等早速御届可奉申上旨、自然右先々ニ而買入方差支候儀も有之候ハ、其段も可奉申上旨被 仰渡、依之右御下知四ヶ国江手配仕承引候得共、何方茂米払底又ハ津留等ニ而買入方出来兼当惑心配罷在、再三右国々江罷越篤与承繕候処、同様米払底二者有之候得共、場所柄ニ寄金銀右之通ニ差支候向茂御座候ニ付、金子さへ持参仕候ハ、多少買入出来可申哉ニ奉存、前条御沙汰被成下候御銀御下ヶ之儀奉願置候上、私手銀才覚之金子等差加へ勢弱桑名表江出張仕、於彼地御米式千式百六拾四俵買請、桑名川筋濃弱栗笠迄船積仕、同所江弱米原迄陸地附越、同所江大津迄湖船にて積取無恙御当地江着米仕候段翌西四月十二日御届奉申上候処、右俵数市中米屋共江割付、代銀三十日延之積を以壺石ニ付百六拾三匁式分替ニ而壳渡可申旨被 仰渡候ニ付、夫々取計仕候処、右米を以市中米屋共江錢百文ニ付白米五合壳被 仰付候儀ニ御座候、付而ハ勢弱路ニ而買付直段与市中米屋共江壳渡候直段喰違損銀等御座候処、此□□銀之分御役所江御弁銀御下ヶ被成下候儀ニ御座候、□□米為買入国々江度々出張往来雜費等ハ自分

入用を以相勤候儀ニ御座候、依之同十二月廿七日被 召出、右米穀買入之儀ニ付去申十二月以来度々遠方江罷越、払底之時節柄格別骨折、雜費等茂相掛候ニ付為御手当銀三拾枚被下置候段被 仰渡頂戴仕候、

一同八酉年二月十九日大坂乱妨ニ付、同月廿三日東

御奉行梶野土佐守様神峯山寺江御出馬御仕度之節、御兵糧米御用被 仰付、則米并塩噌漬物等夫々御買上ヶ被 仰付候付、即刻白米ニ仕立、其外塩噌漬物等取揃、右御用無滞相勤候ニ付、同年十二月廿三日被召出、右御兵糧御用相勤候付金五百疋被下置候段仰渡、頂戴仕候、

右御用米会所由緒奉申上候様被 仰付候ニ付、貸付会所私江被為 仰付候由緒書奉差上候、以上、

天保九戌年六月

前川五郎左衛門(印)

史料三 文政十三年(一八三〇) 東西御役所

拝借金銀元高諸願留

(表紙)
「文政十三庚寅年三月調

文政十三庚寅年正月改東西

御役所 拝借金銀殘元高

天明八申年四月以来諸願

例 書 留

六角
御用米会所」

東 御役所拝借金銀高

寛政八辰年六月

金八百八拾兩三分式朱永五拾五文七分六厘四毛

銀千四百九拾七貫八百拾三匁六分五厘

右之内

金百六拾兩

寛政八辰年十二月⁶

銀貳百六拾貫目 文政十二丑年十二月迄 上納

引殘

金七百貳拾兩三分式朱永五拾五文七分七厘四毛

銀千貳百三拾七貫八百拾三匁六分五厘

右者文政十三寅年正月改御金銀高

東公方拝借

寛政六寅年閏十一月⁶

元銀七貫五百六拾五匁八厘但利足月六朱定

右者毎年六月十二月毎二利足計上納

東勘定方拝借

元銀拾貫目

但利足月六朱定

右者毎年六月十二月毎二利足計上納

東御數方拝借

元銀拾五貫目

但利足月四朱定

右者毎年六月十二月毎二利足計上納

西 御役所拝借金銀高

寛政八辰年六月

金百壹兩三分永貳百三拾貳文

銀三百八拾七貫百七拾壹匁八分八厘六毛

外利足滞

金貳拾壹兩三分永貳百文六分四毛

銀百七拾四貫四百九拾目八分八厘六毛

合 金百貳拾四兩三分永百⁶拾貳文六分四毛
銀五百六拾壹貫六百拾貳匁七分四厘貳毛

右之内

銀貳百七拾貫目

寛政八辰年十二月⁶ 上納
文政二丑年十二月迄

引殘金百貳拾四兩三分永百八拾貳文六分四毛

銀貳百九拾壹貫六百六拾貳文匁七分四厘貳毛

右者毎年文政十三寅年正月改殘金銀高

就御尋口上書

一 近江屋忠藏の銀子貳貫目借請罷有候哉之儀御尋御座候、此儀忠藏口入を以銀貳貫目高瀬川筋正面上ル町惣屋万兵衛江貸附置候処、其後銀貳貫目会所入用ニ付右忠藏方振替置候、依之右代りニ惣屋万兵衛江貸附之証文巻通忠藏江預置候儀相違可御座候、此度忠藏御吟味ニ付前書振替銀上納可被 仰付候ハ、相納候様可仕候得共、右会所預候貸附証文御下ケ被 成下候様御断奉申上候、右之通御聞濟被成下候ハ、難有可奉存候、御尋ニ付此段奉申上候、以上、

天明八申年四月

亀屋茂 七印

亀屋六右衛門印

御奉行様

米会所

初発会所相建候儀、其外御囲米代銀延納并増冥加等之訳御尋ニ御座候、

此儀御用米会所仕来書付帳面一冊奉差上候、取初米会所被仰付候訳新規御囲米被 仰付候ニ付、私共米商売人為申合渡世利徳等相考奉願候儀ニ而者曾以無御座候、本文之通御時節柄ニ付 御上御思召ニ付被 仰付候御儀、御用筋銘々商売之冥加難有奉存相勤候御儀ニ御座候、享保廿年

当酉年迄五拾五年之内連綿相続、中絶無御座候処、六年以前辰年御払米無之、御米取払之助成を以相勤来候処、御払米無之当時必至与引詰り難相勤、追々退役相願病氣之者多、無人数ニ而続兼候得共、申年火災大變類焼仕凌方無御座難儀当惑罷在候、御米代銀返納并増冥加等之訳本文仕来書之通ニ御座候、

一 火災迄者会所取メ方等如何仕来候哉与御尋御座候、此儀前書申上候通火災迄者会所仕来之取計方ニ而相勤来候処、右之通六年前御払米無之、取初御囲米始而被 仰付候節、会所年分之諸入用大積頭取・組頭・手代給銀并家賃銀・飯米・塩・薪・筆・紙・墨等込入用御書付被 下置、当時ニ至右入用高合増不申、半年々奉伺米屋家数ニ取集会所入用相賄来り候処、火災後度々御悲願之御触書ニ乗シ米屋共会所入用割出銭致兼、且渡世手広ニ為可致会所へ無断新規ニ米商売初候者大分在之候得共、私共儀御触書之御趣意ニ随、新規米屋者会所入用割懸ケ不申、依之仕来之米屋共新規之米屋江割懸ケ不申段会所積り申合、去申七月前并十一月并当酉六月共入用割合米屋方相集不申、会所日用等茂差支誠難勤難儀当惑仕候ニ付、御勘定方へ度々奉願候得共、追而御沙汰可被為有迄者諸商売共世上之及見ニ而相凌候様被仰付候ニ付無是非是迄相勤罷在候得共、世上新規米屋共会

所之手二付仕来相守商売可致旨被 仰付被下候様奉願候、
御尋二付此段奉申上候、以上、

寛政元年酉七月

御用米会所

丸屋久兵衛印

金屋九兵衛印

伊丹屋与兵衛印

伏見屋八兵衛印

沢屋武兵衛印

亀屋六右衛門印

御奉行様

口上書

一新御囲米代銀貸附之儀御大切之御米代銀ニ而候間、念入貸
付可申旨元文式巳年被 仰渡、若相滞候節者早速可申上旨、
則貸附証文御案文被下置候、

一宝曆五亥八月御米代銀諸向江貸附之内相滞候分奉願候節者
御日切被 仰付方東西御勘定方御同様ニ被 仰付被下候、
但御糺之上冥加銀差上候後者右貸付銀相滞候節御取立之儀、

東 御勘定方江奉願候御儀ニ御座候、勿論御取立奉願候
節者為御替銀滞置嚴敷御取立被為 仰付被下候、

一明和五子十一月、右貸附引当之家屋敷御欠所ニ相成候分者

家代銀私共江被下置候様奉願候処、西

御役所御評議之上前々之通願之趣御聞届ケ被成下、其後貸
付引当御欠所ニ相成候分者御払代銀米会所江被下置候、

一御囲米代銀并大豆御払代銀貸付利足之儀者一ヶ月二六朱
彦歩三迄相對を以貸附来候、右之趣就御尋書付を以奉申上
候、以上、

寛政元年酉十一月九日

御用米会所

丸屋久兵衛印

金屋九兵衛印

伊丹屋与兵衛印

伏見屋八兵衛印

沢屋武兵衛印

亀屋六右衛門印

東御勘定方
御役人様

(朱書)
「此書付右口上書之扣帳面ニ致懸帑ニ在之候ニ付、一緒ニ書出候
哉又者別帑ニ而差上候支哉難相分候事」

一安永式年巳正月奉請負候御冥加銀可差上旨被 仰付、百五
十日延御米代銀貸付為御替銀同様ニ御取立奉願、壹万石ニ
付銀式拾四貫三百目可差上旨御請申上候、此節者御米代銀
百五十日延ニ而上納仕候故、御冥加銀茂右之通之積り方ニ

御座候、尤安永三午年々又式百十日延上納被 仰付候、依之沓石ニ付式勿宛増冥加上納仕候ニ付、御取立御日限者御前ニ而取初七日切ニ被 仰付、其後御勘定方ニ而七日切式ケ度、猶又御日延奉願候者五日切式ケ度、其上不埒之者者本人手錠証人町預被 仰付、其上不埒之分者七日切式ケ度御日延奉願候得者本人牢舎証人手錠、引当之分其町江被 仰付貸附銀相納候様町分江被 仰付候事、

〔付箋〕
「丸屋久兵衛与申者へ御囲米代銀貸付置候処、口入越後や如八方ニ而証文沽券状共紛失いたし候付、新沽券状願之例」

付箋 口上書

一千本通寺之内上ル五辻北町丸屋久兵衛殿義御会所引請之御囲米代銀不納ニ付、右代銀為工面同人所持之家屋敷沽券状沓通差出シ被置候ニ付、御会所御囲米代銀御上納之節ニ越後屋宇八世話を以銀高三貫五百目私方致出銀、右沽券状私方江請取土蔵ニ入置候処、当二月廿八日夜私方土蔵計焼失仕、右沽券状・証文共消失仕、御大切之御割印付之沽券状消失仕、不調法之段申訳茂無御座奉恐入候、右之段早速御届可申筈之処、若哉土蔵方出シ置相殘御座候哉与吟味仕罷在候而、御届延引仕候段奉恐入候、何卒恐多御儀ニ奉

存候得共、新沽券状御割印被為 下置候様御会所宜敷御取計御願上被下候様奉願上候、尤願之通新沽券状被為 下置候上者是迄之通新沽券状并証文共猶又私方江御渡被成下候様仕度奉頼候、是等之儀偏宜敷御取計可被下候、奉頼候、以上、

寛政八年辰六月

越後屋宇右衛門印

御用米会所

御役人中

乍恐奉願口上書

一千本通寺之内上ル町丸屋久兵衛江先達而 二条御藏両御囲米割渡候ニ付、右代銀引当ニ久兵衛所持之家屋鋪御沽券状沓通米会所ニ取置候処、右御米代銀五貫百貳拾貳匁三分久兵衛方不納仕候ニ付、其節口入方越後屋宇八世話を以内銀主三条通高倉西入町越後屋宇右衛門方江右沽券状相渡置銀高三貫五百目会所振替借り入候而上納銀相立申候、其後久兵衛方返済可仕候、等閑ニ相成相立不申候、然ル処越後屋宇右衛門方当二月廿八日土蔵焼失之節、右沽券状土蔵ニ而類焼仕候ニ付、此節久兵衛方へ新沽券状御願申上呉候様再応茂掛合候得共、彼是申延し于今御願茂不申上候、御大切之御割印御座候沽券状ニ付奉恐入候、何卒久兵衛被 召

出新沽券状早々御願奉申上候様被為 仰付被下候ハ、難有仕合可奉存、乍恐此段御願奉申上候、以上、

寛政八年辰七月

御用米会所

伊丹屋与 兵衛印

沢屋武 兵衛印

御奉行様

御請書

一千本通寺之内上ル町丸屋久兵衛江二条御蔵両 御囲米割渡し、右代銀五貫百貳拾貳匁三分相滞候ニ付、久兵衛所持家屋敷御沽券状壱通米会所江取置候処、三条通高倉西入町越後屋宇右衛門方江右沽券状相渡置銀高三貫五百目会所江振替借入置、其後久兵衛方返済不仕、其俣相成在之候処、越後屋宇右衛門方当二月廿九日土蔵焼失之節、右沽券状土蔵類焼仕候、依之久兵衛江其儀申聞新沽券状御割印御願申上呉候様再応懸合候得共彼は申延御願不申上候ニ付、此度久兵衛方被 召出新沽券状御願奉申上候様被為 仰付被下候様奉願上候処、早速御召出之上願之通被仰付候ニ付、新沽券状御割印町中々相願候上早速御割印被成下、沽券状会所へ御渡被成下難有奉存候、則宇右衛門方江相渡申候ニ付、御請書奉差上候、以上、

寛政八年辰七月

御用米会所

伊丹屋与 兵衛印

沢屋武 兵衛印

御奉行様

〔付箋〕
「御囲米代銀貸付滞口々為御替同様之御日限被仰付候儀取初年月等御尋ニ付御書付之例」

乍恐口上書

一二條御蔵御囲米代銀貸付相滞候分御取立奉願候儀、為御替同様之御日切被 仰付候儀取初年月等可奉申上旨被 仰付奉趣致候、此儀安永年中御囲米御請負奉申上候ニ付、其節右御米代銀貸付相滞候もの茂有之候而、為御替銀貸附同様ニ御取立被 仰付候儀ニ而、以前之儀者火災之節諸帳面焼失仕、何等之儀も留書無御座候、乍恐此段奉申上候、以上、
寛政八年辰七月

御用米会所

〔朱書〕「御懸
上田弥右衛門様
本多金右衛門様
平尾安佐衛門様」

伊丹屋与 兵衛印

沢屋武 兵衛印

御奉行様

〔付箋〕
「亀屋九兵衛与申者へ御用銀貸付置候処、其後死去いたし、色々品替り在之引当

沽券状欠所被 仰付候付、被下願之例」
〔朱書〕 乍恐口上書

天明六年午七月〆同十一日限
一銀貳百目

近衛殿表町
死失 龜屋九兵衛
死失 松屋武兵衛

右之者共印形を以御役所御用銀之内貸付置候処、去ル寛政元年酉年六月廿四日九兵衛〆妻まつ江讓渡し、九兵衛儀者死去仕候、其後寛政三亥年八月四日まつ房屋儀兵衛江死後讓出置候、右まつ儀茂死去仕候二付、房屋儀兵衛所持二相成候処、当辰四月廿三日家出仕候二付、其節町分〆御届奉申上候旨承知仕候、右二付先達而龜屋九兵衛所持之節書面之銀高貸付置、為引当家屋敷沽券状取置候二付恐多御儀二御座候得共、右房屋儀兵衛所持家屋敷御欠所被為 仰付候ハ、御憐愍之上家代銀之内ニ而貸付銀高被下置候様乍恐奉 願上候、則沽券状証文共奉入御高覽候、此段御聞届被成下候ハ、難有可奉存候、以上、

寛政八年辰七月十日
〔朱書〕 西御欠所方

御用米会所
伊丹屋与 兵衛印

御懸
木村小三郎様」

沢屋武兵衛印

御奉行様

〔付箋〕
「米会所頭取・組頭之者共夫々居町年寄・

五人組役相除キ可申旨町代〆居町年寄之者江被 仰付被下候様奉願候例」
〔朱書〕 乍恐口上書

一御用米会所役被為 仰付候節、前々〆私共町年寄・五人組役差除キ可申旨、持場町代中〆町年寄役之者江被 仰渡候儀二御座候、然ル処貸附方惣代并米方惣代之内ニ茂此節町役相勤罷在候者茂有之候得者、右町役ニ差支折節者会所用向茂相断候二付、右躰ニ而者追々勝手ヲ申立差支有之候而者、御上納方并米筋用向示談茂難行届、不取計ニ相成可申与奉存候、何卒右両惣代之者茂私共同様町年寄・五人組役之儀両惣代役相勤候年限中者指除キ可申旨、持場町代中〆銘々町分へ被為 仰付被下候様乍恐奉願上候、左候得者御上納方米方等行届、両惣代とも申合出情可仕与奉存候、御慈悲ニ此段御聞届被成下候ハ、難有可奉存候、以上、
寛政八年辰九月七日

御用米会所

沢屋武兵衛印
伊丹屋与 兵衛印

御奉行様

〔朱書〕

「西 御役所御公夏方深谷平左衛門様・酒井宗助様御掛ニ而御尋二付申上候書付」

御尋二付口上書

一御用米会所被為 仰付候義、享保廿外十月東於 御役所而殿様御立会之上、京・大津米屋之内ニ而頭取四人組頭四人米筋御用之趣被為 仰渡、御定書奉頂戴、且又而 御役所^ヲ御用之趣被為 仰渡候御事、

依之御用米会所与懸札被下置候御事、

右米会所被為 仰付候訳、其節米相場下直ニ付、御定直段御触書被為成候而、米相場高直ニ相成候様御政道被為成候御事、

然ル処有米多御払米不捌、致御入札候ものも一向無御座程之時節ニ御座候、依之米筋御用之儀多御座候得者、折節を考素人之者米会所相願候者在之由被為 仰聞、米筋御用之儀者素人之もの取計ニ而者末々ニ至米屋共難渋之筋茂可在之哉与被為 思召、御用米会所不存寄米屋共江被為 仰付候ニ付御請奉申上候、當時ニ至退役之儀相願候得者代り役米屋共之内江被為 仰付相 続仕来候御事、

一明和七寅年七月米筋御用相勤来候以規模、頭取・組頭之者共何^ト更によらず自分ニ奉願候儀ニ在之候節者居町ニ不相拘、直ニ願書奉差上候様而 御奉行様御通達之上御赦免被成下候御更、

一明和九辰年大津表御支配被為 替候後者、京御用米会所頭取三人組頭三人ニ而相勤、大津表御用米会所之儀者相分申

候ニ付、御定札請書改被成下候御事、

一貸付方惣代六人奉願候儀者寛政八辰年当会所拝借金銀相滞候ニ付、返上納取調之儀ニ付、願之通被 仰付候御事、

一米方惣代九人奉願上候儀者拝借金銀相滞候ニ付、米屋共申合等不行届ニ付、頭取・組頭病氣又者差支等在之候節者、役方同様罷出候様寛政八辰年七月被 仰付候御事、

一寛政十一年未五月、京都米屋一統九組ニ相分ケ一組ニ式人宛年行支相立、尤御触流等其外諸更年行更江申達、触世話人江申通、尚又米屋共江申送候様仕度旨奉願上候処、願之通被 仰付候事、

右御尋ニ付奉申上候、以上、

享和三亥年正月廿日

御用米会所
都倉屋与兵衛印

御奉行様

〔付箋〕
〔笹屋長兵衛与申者より米会所役人江貸銀出入ニ而御訴詔申上候一件但其節会所役方之者上訴詔之例書〕
御請書

上立壳淨福寺西入町笹屋長兵衛^方私共并油小路元誓願寺下ル町越後屋武助相手取貸銀出入、同人^方私共并釜屋二条上ル町若狭屋九郎兵衛相手取貸銀出入御訴詔申上候ニ付、御

裏判式通者九郎兵衛町分、壹通者武助町分江相附在之候間
罷越、右目安見請候上埒明候事ニ候ハ、可相済、滯儀在之
候ハ、返答書相認、来月七日明六ツ時月番御役所へ罷出対
決可仕旨被 仰渡奉畏候、然ル上者申談相済不申候ハ、右
日限返答書相認、御月番御役所へ罷出対決可仕候、依之御
請書奉差上候、以上、

享和三年亥閏正月廿八日

都倉屋与兵衛印
龜屋治左衛門印
奈良屋長兵衛印
伊勢屋市兵衛印

御奉行様

乍恐口上書

一 笹屋長兵衛義米会所出入之儀ニ付越後屋武助儀茂相手取御
願申上候ニ付、御裏判頂戴仕奉畏候、然ル処右武助儀者米
会所貸附方惣代役相勤罷在候ものニ而、是迄米会所懸り出
入之儀在之候節者米会所付添罷出候ニ付、何卒此度之儀
米会所付添罷出申度、此段御断奉申上候、右之趣御聞済
被成下候ハ、難有可奉存候、以上、

享和三年亥十一月六日

御用米会所
伊勢屋市兵衛印
都倉屋与兵衛印

御奉行様

乍恐口上書

一米会所役之者共両

御役所役様江罷出候節者、役中者自分之儀ニ而も上ハ訴詔之
儀先達而御願申上御聞済被成下難有奉存候、此度笹屋長兵
衛米会所役人越後屋武助相手取居町江御裏判相付申候得
共、此度之儀者別而米会所ニ相拘候儀ニ付、居町ニ不拘会
所役人付添上ハ訴詔ニ而罷出申度、乍恐此段御届奉申上候、
御聞済被成下候ハ、難有可奉存候、以上、

享和三年亥十一月六日

御用米会所
伊勢屋市兵衛印
都倉屋与兵衛印

御奉行様

乍恐済状

一 上立売浄福寺西入ル笹屋長兵衛米天五巳年十一月、御用
米先役之者連印ニ而元銀高式百五拾匁借請候証文を以元利
八百八拾九匁滞候旨私共相手取、去亥閏正月廿三日御願奉
申上候ニ付、去亥二月七日対決被 仰付、実意を以引合事

濟候様双方江被 仰渡難有仕合奉存候、然ル処、其後追々
対談仕、此度銀貳百五拾匁二金三步相渡濟切、右証文受取
申候、以来何之申分無御座候二付、乍恐濟狀奉差上候、御
慈悲を以右之趣御聞届被成下候ハ、難有仕合可奉存候、以
上、

文化元年子八月廿六日

東様於 御前
御聞濟被 仰渡候

森川様御時
上田弥右衛門様
平尾安右衛門様

御奉行様

御用米会所
貸附方惣代

組頭 越後屋 武助印
同 伊勢屋市兵衛印
同 奈良屋長兵衛印
頭取 都倉屋与兵衛印

同 龜屋次左衛門印
代万屋源兵衛印

御役所金滞
天明八年申十一月々酉四月限
一元利金六拾匁両式歩
銀拾匁八分

右寛政十一未年七月十一日被 召出
同年八月十一日迄三ヶ度御日切
被 仰付候、

当年 寄 吉兵衛
病死 頭百姓 清兵衛
当 頭百姓 庄兵衛
病死 村惣代 惣五郎
当 村惣代 源兵衛

(付箋)
「膳所別保村其外村々江御用金銀貸付
置候処、役前之者不残死いたし候二付跡役
之者者老人も連印無之候得共濟方被仰付候
例」

付箋 御困米代銀滞
天明二年寅四月々九月限
一元銀六百目

江刃膳所別保村

病死 庄 屋市郎兵衛
当 庄 屋十兵衛
病死 年 寄九郎兵衛

病死村惣代次郎兵衛
右寛政九巳年五月廿二日被 召出

江刃甲賀郡土山宿南北
退役 庄屋 万右衛門
当 庄屋 又左衛門
退役 年 寄 又左衛門
退役 年 寄 權兵衛
当 年 寄 權右衛門
村惣代 平右衛門
退役 庄屋 伊兵衛
当 庄屋 藤右衛門
退役 年 寄 權左衛門
当 年 寄 善右衛門

同年八月三日迄三ヶ度御日限
被 仰付候、

右之通ニ御座候、以上、

文化五年辰十二月廿六日

御用米会所

〔付箋〕
「米会所役人共近来多病ニ付暫之間
米方貸付方兼帶ニ而相勤度願一件」
〔付箋〕
乍恐口上書

一御用米米会所米方惣代之儀近来病人多、無人ニ而相勤罷在
候処、例月御取立罷出候節、差懸病氣等ニ而差支候而者奉恐
入候ニ付、何卒御憐愍を以米方貸付方共暫之間御取立日罷
出候節兼帶仕度奉存候、此段御聞濟被成下候ハ、難有仕合
可奉存候、尤別紙名前書奉入御覽候、右之段奉願上候、以
上、

文化三年寅九月

御用米会所

組頭伊勢屋市兵衛印
同 奈良屋長兵衛印
頭取都倉屋与兵衛印
同 亀屋次左衛門印

御奉行様

〔付箋〕
「菱屋惣七与申者江米壳渡置候処代銀

相滞、其上家出いたし候付居所相糺候処、大坂
曾根崎村ニ住居いたし居候ニ付、当地御役所へ
御召出之義奉願候一件、
〔付箋〕
乍恐奉願口上書

猪熊松原上ル町

菱屋惣七

私儀米屋之内ニ而右惣七江当正月ノ米壳渡し、盆前迄米代
銀四百六拾八匁九分七厘相滞候処、盆後早々済方可仕旨申
之候ニ付相待遣申候所、七月廿日夜家出致し候旨ニ而町分
ノ御届奉申上候由承知仕候、其後居所等相分り不申候処、
当節大坂曾根崎村伏見屋半兵衛借屋長浜屋熊次郎与者親類
之由ニ而、右熊次郎方ニ同居仕り候由承り候ニ付、早速罷
下り相糺候処、相違無御座、則親るい熊次郎方ノ同居致居
候旨之書付茂取罷帰候、元来私儀薄元手ニ而商売仕居候処、
纔之間ニ右銀高相押払呉不申候而者必至与差違難儀当惑仕
候、尤惣七儀右躰不埒之者ニ御座候得者、此上身隠等仕候
儀難計御座候ニ付、何卒乍恐御憐愍を以右惣七儀御召出被
成下、居町へ御預ケ之上右米代銀早々応対通相渡呉候様被
仰付被下候ハ、广大之御慈悲与如何計難有仕合可奉存候、
以上、

米屋之内

岩上六角下ル町

近江屋半兵衛印

文化五年辰年八月十四日
御奉行様

右惣七^ノ御願奉申上候通於私共奉願上候、御聞濟被成下候ハ、重々難有仕合可奉存候、以上、

御用米会所
頭取都倉屋与兵衛印

右八月廿四日御召之処、惣七并熊次郎共又候大坂ニ而家出仕候旨同所^ノ御届申上候二付、此段被 仰渡候、尚居所見届の義早々可申出候旨被 仰渡候、

〔付箋〕大坂難波新地加賀屋柳藏事改名、同喜六与申者へ御用銀貸付置候処、相滞候付、御取立奉願候例
〔付箋〕乍恐奉願口上書

文化十年酉正月^ノ六月限
一残元金七両
利足滞百拾七匁九分

大坂難波新地三丁目
泉屋小四郎借屋
加賀屋柳藏事
改名

加賀屋喜六
同所御池通三丁目
住吉屋市藏事
改名

天王寺屋安兵衛
北墅境内鳥居前町
京屋治兵衛
聖護院村領秋日町
大津屋伊八

右連印を以 御役所金貸附置候処、返済相滞、去亥十二月十一日奉願上候処、早速御召出被成下、追々御日限被為

仰付被下難有奉存候、然ル処済方不仕候二付、当月四日奉願上候処、何分急々済方可仕候間、日数七日之内御猶予御願申上呉候様相頼候二付、此段奉願上御聞濟被成下、其砌^ノ対談仕候得共今一段落合兼候間、此上之御慈悲を以今日^ノ日数五日之間御猶予被為 成下候ハ、無相違済方可仕旨申之候間、何卒格別之御憐愍を以此段御聞濟被成下候ハ、難有仕合可奉存候、以上、

文化十三年子三月十一日
御用米会所
伊勢屋市兵衛印

御奉行様

〔付箋〕烏丸通□頭屋町家屋敷沽券状御割印
〔付箋〕預候節苗字相名乗ル義就御尋答書例
〔付箋〕就御尋口上書

一当町中所持家屋敷壹ヶ所此度前川莊兵衛方江壳渡候二付、御割印之儀奉願候処、莊兵衛儀苗字相乗候訳御尋二御座候、此儀莊兵衛義御用米会所貸付方相勤候二付、苗字相名乗候儀二御座候、就御尋此段奉申上候、以上、

天保二卯年六月廿五日
烏丸通□頭屋町
年 寄七郎兵衛印
五人組市兵衛印

卯六月廿五日東

御役所江御割印奉願候処、扣之通書付

差上莊兵衛次上下ニ而上訴仕、即日御

割印被下候事、

御掛 関根中五郎様

吉岡伊和助様

御奉行様

〔付箋〕
「米会所頭取・組頭之者中御勝手通り願之一件」

〔付箋〕
乍恐奉願口上書

一御用米会所之者共享保廿卯年〆御定札頂戴仕連綿相続罷在、誠以難有仕合奉存候、右二付会所頭取・組頭役之もの共御当地大火前迄者御勝手通ニ而年頭・八朔・節句々、暑寒御機嫌等も奉伺候儀ニ御座候処、大火後〆中絶仕有之、歎ケ敷奉存候、外会所向之もの共御勝手通り罷在、御礼等奉申上候儀ニ御座候得者、何卒以前之通頭取・組頭役之もの共、外会所並之通中御勝手江罷在御礼等相勤申度奉願候、右之趣御聴済被成下候得者、以前之規矩茂相立如何計難有仕合奉存候、以上、

文政九年戊十二月十七日

御用米会所

伊勢屋 市兵衛印

十一屋次 兵衛印

伏見屋市郎兵衛印

丹波屋嘉兵衛印

御用人中様

〔付箋〕
「中立売通田丸町江御用金貸付置候処」

〔付箋〕
「返済相滞候付追々御日限度数相重り候付御答被仰付候処、年寄役者人ニ相成、五人組平町人等死失ニ付組町江御預りニ相成候例」

〔朱書〕
「嘉永二酉年六月中立売通田丸町中江」

御役所御用金貳拾兩貸渡置候処、返済相滞候ニ付御取立之義奉願候処、追々御日限度数相重り候付年寄手錠之上組町

江御預仰付候例、」

追訴

嘉永二酉六月〆八月限
一元金貳拾兩

中立売千本東入田丸町
借主町中
年寄

〔朱書〕
「組町聚楽高屋町付添」

〔朱書〕
「手錠」 近江屋伊兵衛

病死菱 屋弥兵衛
同 岡田屋太蔵

右ハ去戌八月三日付被 召出、
同十一月十一日迄都合拾壹ケ度

右之通嘉永四亥年四月十一日於 御白洲

御前御直々伊兵衛手錠之上五日限組町江御預被 仰付候事、
御掛り神沢条之助様

喜多尾平次様 弦四郎次郎

東御奉行河野對馬守様御代

史料四 天保三年(一八三二) 二條御藏御囲米代

金銀貸付証文案

(袋表)

「天保壬辰年閏十一月三日

奉伺御聞濟之上相改

二條御藏御囲米代金銀貸附証文案

(袋裏)

御用米会所」

(表紙)

二條御藏御囲米代金銀貸附証文案紙

(朱書)

「家屋敷沽券状入連印貸」

預申御米代 銀金 之事

二條御藏御囲米代 銀金 之内

一 銀金 何程 但利足月何程定

右者御米代 銀金 連印を以慥預申処実正也、来何月廿五日限無相違御上納可仕候、則為引当

何町通何町何側

一家屋敷壹ヶ所 表口何間 裏行何間

何屋誰所持

(朱書)

「此間三四寸計明ヶ置可申、沽券状見改之上名前違等有之候ハ、此処江品書可致事余々之順也」

右沽券状壹通相渡置申候、

右之通差出置候、万一及遲滞候ハ、右家屋敷早速売払代金を以御上納可仕候、其上不足仕候ハ、相殘印形之者引請、元利都合無難洪急度御上納相立可申候、依而如件、

年号支何月

所書

何屋 誰

妻 誰

忝 誰

所書

何屋 誰

御用米会所

(朱書)

「家屋敷沽券状入町中引請貸」

預申御米代 銀金 之事

二條御藏御囲米代 銀金 之内

一 銀金 何程 但利足月何程定

右者御米代 銀金 連印を以慥預申処実正也、来何月廿五日限無相違御上納可仕候、則為引当

何町通何町何側

一家屋敷壹ヶ所 表口何間 裏行何間

何屋誰所持

(朱書)

「此間三四寸計明ヶ置可申、沽券状見改之上名前違等有之候ハ、此処江品書可致事余々之順也」

右沽券状壹通相渡置申候、

右之通差出置候、万一及遲滞候ハ、右家屋敷早速売払代銀を以御上納可仕候、其上不足仕候ハ、町中引請諸軒役取集、元利都合無難洩急度御上納相立可申候、若連印之内町役相退候坎故障品替等出来候ハ、跡役之もの江無相違為引請可申候、尤先役之者一同相遁申間敷候、依而如件、

年号支何月

所書

何屋 誰

引請町中 何屋 誰

五人組 何屋 誰

同 何屋 誰

同 何屋 誰

町惣代 何屋 誰

御用米会所

(朱書)

「町方無引当連印貸」

預申御米代 銀金 之事

二條御藏御囲米代 銀金 之内

一 銀金 何程 但利足月何程定

右者御米代 銀金 連印を以慥預申処実正也、来何月廿五日限無相違御上納可仕候、万一及遲滞候ハ、相殘印形之者引請、

元利都合無難洩急度御上納相立可申候、依而如件、

年号支何月

所書

何屋 誰

同 何屋 誰

御用米会所

(朱書)

「無引当町中引請貸」

預申御米代 銀金 之事

二條御藏御囲米代 銀金 之内

一 銀金 何程 但利足月何程定

右者御米代 銀金 連印を以慥預申処実正也、来何月廿五日限無相違御上納可仕候、万一及地帯候ハ、町中引請軒役取集、元利都合無難洩急度御上納相立可申候、若連印之内町役相退候坎故障品替等出来仕候ハ、跡役之もの江無違背為引請可申候、尤先役之者一同相遁申間敷候、依而如件、

年号支何月

所書

何屋 誰

引請町中 何屋 誰

五人組 何屋 誰

同 何屋 誰

同 何屋 誰

御用米会所

町惣代 何屋 誰

右者御米代^{銀金} 町中就要用連印を以慥預申処実正也、来何月廿五日限無相違御上納可仕候、則為引当

何町通何町何側

表口何間
裏行何間

何屋誰所持

(朱書)
「家屋敷書入連印貸」

預申御米代^{銀金} 之事

二條御藏御囲米代^{銀金} 之内

一^{銀金} 何程 但利足月何程定

右者御米代^{銀金} 連印を以慥預申処実正也、来何月廿五日限無相違御上納可仕候、万一及遲滞候ハ、所持家屋敷早速売払代銀金を以御上納可仕候、其上不足仕候ハ、相殘印形之者引請、元利都合無難洪急度御上納相立可申候、依而如件、

年号支何月

所書

何屋 誰

同

何屋 誰

御用米会所

(朱書)

「沽券状町中要用貸」

預申御米代^{銀金} 之事

二條御藏御囲米代^{銀金} 之内

一^{銀金} 何程 但利足月何程定

年号支何月

所書

預町中

年寄 何屋 誰

五人組 何屋 誰

同 何屋 誰

同 何屋 誰

町惣代 何屋 誰

御用米会所

(朱書)

「無引当町中要用貸」

預申御米代^{銀金} 之事

二條御藏御囲米代^{銀金} 之内

一^{銀金} 何程 但利足月何程定

右者御米代^{金町々} 就要用連印を以慥預申処実正也、来何月廿五日限無相違御上納可仕候、万一及遲滞候ハ、^{町々}軒役取集、元利都合無難洪急度御上納相立可申候、若連印之内町役相退候坎故障品替等出来仕候ハ、跡役之もの江無違背為引請可申候、尤先役之者一同相遁申間敷候、依如件、

年号支何月

御用米会所

郷方之分

(朱書)

「田地山林作徳米書入連印貸」

預申御米代^{銀金}之事

二條御蔵御囲米代^{銀金}之内

一^{銀金} 何程 但利足月何程定

所書	年寄	五人組	同	同	町惣代
預町中	何屋	何屋	何屋	何屋	何屋
誰	誰	誰	誰	誰	誰

右者御米代^{銀金} 連印を以慥預申処実正也、来何月廿五日限無相違御上納可仕候、則為引当

何村之内字何

一上田何反何畝何拾何歩

右同斷

一山林皆式

一作徳米何百何拾石

右之通書入置申候、万一及遲滞候ハ、右

引当早速売払代^{銀金}を以御上納可仕候、其上不足仕候

ハ、相殘印形之者引請、元利都合無難洪

急度御上納相立可申候、依而如件、

年号支何月

御用米会所

(朱書)

「田地山林作徳米書入村中引請貸」

預申御米代^{銀金}之事

二條御蔵御囲米代^{銀金}之内

一^{銀金} 何程 但利足月何程定

右者御米代^{銀金} 連印を以慥預申処実正也、来何月廿五日限無

百姓誰所持	百姓誰所持	百姓誰所持	何百何郡何村
百姓誰所持	百姓誰所持	百姓誰所持	百姓誰
百姓誰所持	百姓誰所持	百姓誰所持	百姓誰

相違御上納可仕候、則為引当

何村之内字何

一上田何反何畝何拾何歩

右同断

一山林皆式

一作徳米何百何拾石

右之通書入置申候、万一及遲滞候ハ、右引当早速売払代銀金を以御上納可仕候、其上不足仕候ハ、村中引請高役取集、元利都合無難洩急度御上納相立可申候、若連印之内村役相退候坎故障品替等出来仕候ハ、跡役之もの江無違背為引請可申候、尤先役之もの一同相遁申間敷候、依而如件、

年号支何月

何易何郡何村

百姓誰

引請村中

庄屋誰

年寄誰

村中惣代誰

御用米会所

(朱書)

「郷方無引当連印貸」

預申御米代銀金之事

二條御藏御囲米代銀金之内

一銀金

何程

但利足月何程定

右者御米代銀金

連印を以慥預申処実正也、来何月廿五日限無

相違御上納可仕候、万一及遲滞候ハ、相殘印形之者引請元利都合無難洩急度御上納相立可申候、依而如件、

年号支何月

何易何郡何村

百姓誰

百姓誰

御用米会所

(朱書)
「無引当村中引請貸」

預申御米代銀金之事

二條御藏御囲米代銀金之内

一銀金

何程

但利足月何程定

右者御米代銀金連印を以慥預申処実正也、来何月廿五日限無相違御上納可仕候、万一及遲滞候ハ、村中引請高役取集、元利都合無難洩急度御上納相立可申候、若連印之内村役相退候坎故障品替等出来仕候ハ、跡役之もの江無違背為引請可申候、尤先役之者一同相遁申間敷候、仍如件、

年号支何月

何易何郡何村

百姓誰

引請村中

庄屋誰

年寄誰

村中惣代誰

御用米会所

(朱書)
「郷方書入連印貸」

預申御米代 銀金 之事

二條御藏御囲米代 銀金 之内

一 銀金 何程 但利足月何程定

右者御米代 銀金 連印を以慥預申処実正也、来何月廿五日限無相違御上納可仕候、万一及遲滞候ハ、所持家數田畑山林等早速売払代 銀金 を以御上納可仕候、其上不足仕候ハ、相殘印形之もの引請元利都合無難洪急度御上納相立可申候、依而如件、

年号支何月

何芻何郡何村

百姓 誰

百姓 誰

御用米会所

(朱書)
「田地山林作徳米書入村々村中要用貸」

預申御米代 銀金 之事

二條御藏御囲米代 銀金 之内

一 銀金 何程 但利足月何程定

右者御米代 銀金 村々 就要用連印を以慥預申処実正也、来何月廿五日限無相違御上納可仕候、則為引当

何村之内字何

一 上田 何反何畝何拾何歩

村中所持

右同斷

一 山林皆式

一作徳米何百何拾石

村中所持

右之通書入置申候、尤 村々 要用紛無之、地頭用 二 而者曾而無御座候、万一及遲滞候ハ、右引当早速売払代 銀金 を以御上納可仕候、其上不足仕候ハ、村々 高役取集、元利都合無難洪急度御上納相立可申候、若連印之内村役相退候坎故障品替等出来仕候ハ、跡役之者江無違背為引請可申候、尤先役之者一同相遁申間敷候、仍如件、

年号支何月

何芻何郡何村

預村中 庄屋 誰

年寄 誰

村中惣代誰

御用米会所

(朱書)
「無引当村々村中要用貸」

預申御米代 銀金 之事

二條御藏御囲米代 銀金 之内

一 銀金 何程 但利足月何程定

右者御米代 銀金 村々 就要用連印を以慥預申処実正也、来何月廿五日限無相違御上納可仕候、尤 村々 要用紛無之、地頭用 二 而者曾無御座候、万一及遲滞候ハ、村々 高役取集、元利都

合無難洪急度御上納相立可申候、若連印之内村役相退候款故
障品替等出来仕候ハ、跡役之もの江無違背為引請可申候、
尤先役之者一同相遁申間敷候、仍而如件、

年号支何月

何勿何郡何村

預村中

庄屋 誰

年寄 誰

頭百姓 誰

村中惣代 誰

何勿何郡何村

預村中

庄屋 誰

年寄 誰

頭百姓 誰

村中惣代 誰

御用米会所

(裏表紙)

御用米会所